

聖徳大学オープン・アカデミー(SOA)の20年のあゆみ

—生涯学習は地域でどのように根づいてきたか—

宮坂 いち子

はじめに

聖徳大学が生涯学習を開始したのは平成4年10月である。平成24年度は開設20周年となる。戦後20年が経ち社会が文化・経済共に安定してきた1965年、フランス人のポール・ラングラン(Paul Lengrand)がユネスコで成人教育推進国際委員会の設置を提唱して以来、それまでの児童期、青年期に限られていた教育が、幼児から高齢者にいたるまで生涯を通して、「いつでも」「どこでも」「誰でも」学べる「生涯学習」の考えが広がった。その進展は学校教育のみならず、公民館や図書館、博物館などの社会教育施設はもとより、民間のカルチャーセンターやスポーツセンターで、学習する機会が提供されるようになった。

その進展の理由の一つは戦後急速に進展した科学技術の経済に与えた影響であろう。経済発展がもたらした金銭的・時間的ゆとりは多くの人々に、リカレント教育の機会と教養の学びを提供する機会となったのである。

発展のもう一つの原因は、今日の日本が戦後最高の高齢化社会を迎えているということであろう。昭和22年、日本人の平均寿命は、女性54歳、男性50歳であった。戦前の人々にとり子供を社会人として育て上げる50代は、また寿命の終わる時であった。しかし厚生労働省の平成22年7月発表の人口動態統計によれば、女性の平均寿命は86.44歳、男性は79.59歳と、男女とも「平均寿命80歳」の時代となってきた。女性達が子育てから解放される年齢も若くなり、子育て後の30年余り、また男性達においても定年退職後の20年間の時間の使い方を考えねばならない時代である。

こうした時代にあって、近隣の大学よりいち早く聖徳大学で生涯学習が提唱されたのは、前学長の川並弘昭先生の英断であった。時代を見通す先見の明と決断力の早さに優れた弘昭先生により、聖徳大学オープン・アカデミーは20年前の平成4年、10講座273名から開始された。以来、時代の要請に応え、受講生は年々増え、ここ数年、前年度より300～500名増となり、春、秋、冬の年間3期の講座の

受講生のべ人数は、平成22年は約7,500名にまでなってきた。

しかし、平成23年3月11日の東日本大震災を境に、受講生の申し込みは激減した。大学所在地の千葉県松戸市は直接の地震の影響は少なく、福島第一原子力発電所からも200キロ離れている。しかし放射能汚染に関しては、松戸市および通学路線である常磐線沿線の柏、我孫子市等は高濃度の放射能汚染のホットスポットと言われ、住民の不安は拭いされない。それでも平成23年4月から多くの受講生が講座に参加している。

この現状で、平成24年度に開設20周年を迎えるにあたり、この20年間のSOAのあゆみの検証と現状分析をして、今後の生涯学習のあり方を検討してみたいと考えた。1day講座を除いたほぼ全受講生1,800名を対象に、平成23年12月講座の講師にアンケート用紙の配布を依頼した。1階受付に回収箱を設置し、762枚を回収することが出来た。以下にそのデータ分析と解析を示す。

1. 受講生数の推移

20年前のSOAの開設準備は、平成4年の生涯学習委員会設置から始まった。同委員会地元松戸住民約4,000人にアンケート調査を行うと共に、生涯学習の先行大学を実情調査した上で、講座の講師の依頼、募集方法等を決定後、9月開始のチラシを配布した。第1回の講座10講座に応募してきた受講生は273名であった。受講生の増加はその後右肩上がりに増え、直近平成16年度から見ても、前年よりプラス590→641→346→141→862→1064→557と増加を続け、平成22年度は7,748名となっている(図1)。

ところが、平成23年3月11日以後のI期講座から前年同期より311人減となった。ここ10年以上必ず前年度より200人前後の増加を見てきているので、そのペースで計算すれば予定数より500人以上の受講生減と言える。II期に310人I期より増加はしたが、前年同期より86名減であ

る。Ⅲ期は1～3月の寒さの厳しい冬であるため、例年受講生数はⅠ、Ⅱ期より均100名ほど減少する。

2. 受講生の男女比・年齢

受講生の男女比はここ数年男性が全体の20%～25%であり、男女比に大きな変化はない（図2）。平成10年は男性

比が11%で、以後14%→17%→19%→20%と増加し、平成14年に初めて男性が20%の割合を占めるようになった。5年前の2倍である。

受講生の年齢層も開設以来50代～70代が70%を占め、大きな変化はない（図3）。早稲田大学のエクステンション・センターや独協大学の公開講座は、若者の受講生が40%

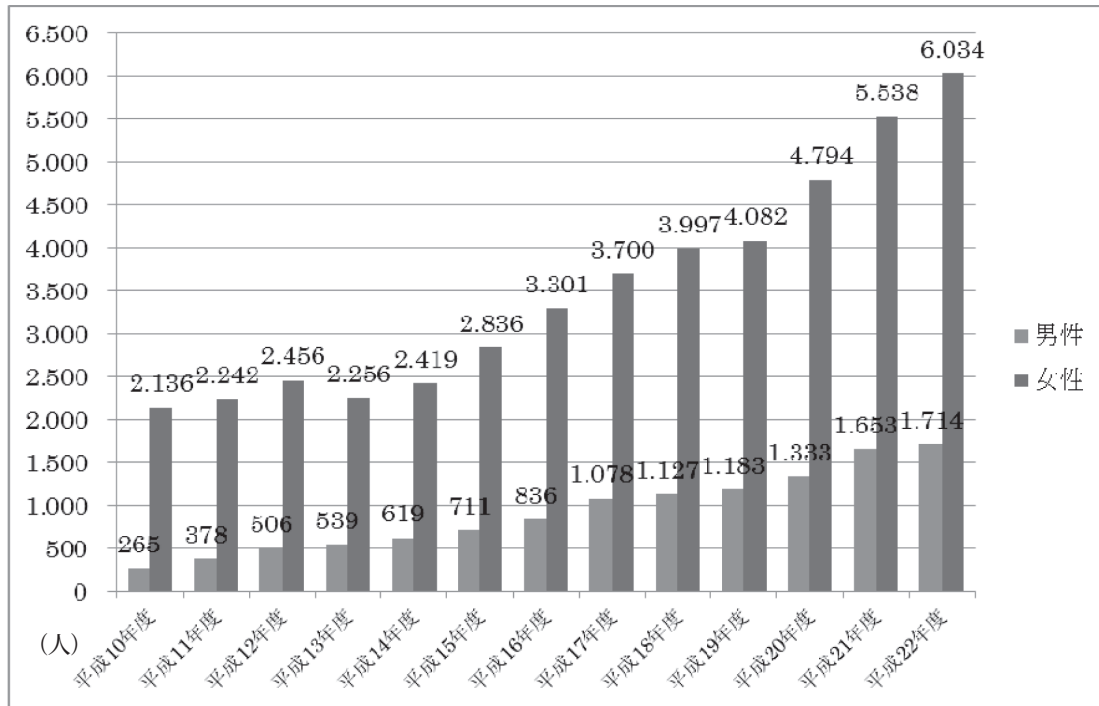


図1 SOA 受講生数の推移

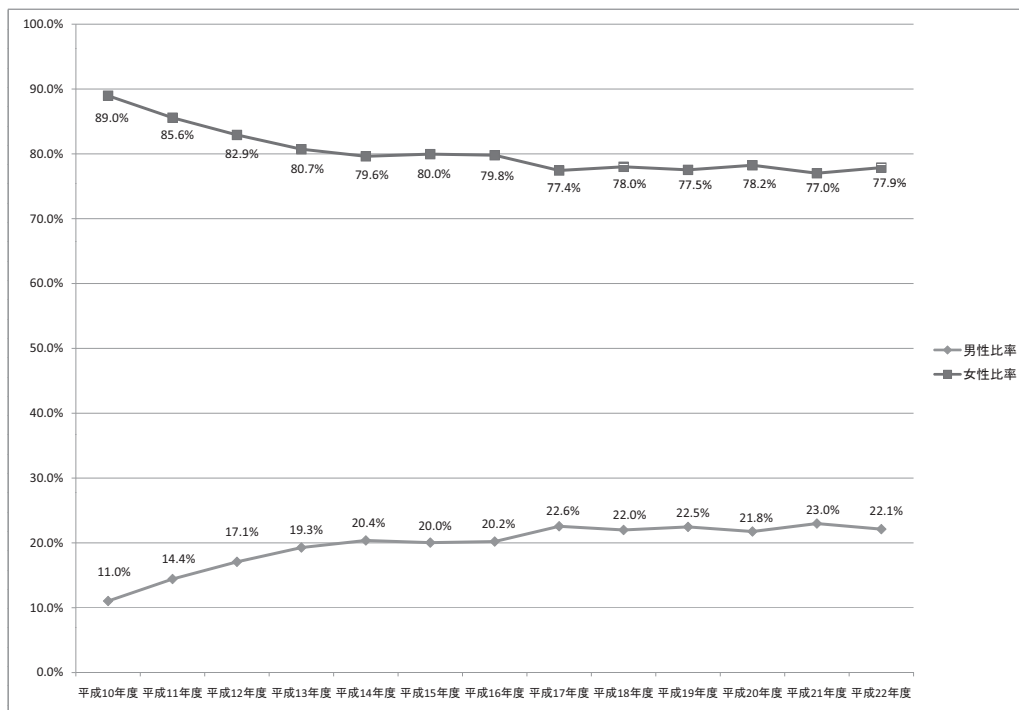


図2 受講生の男女比

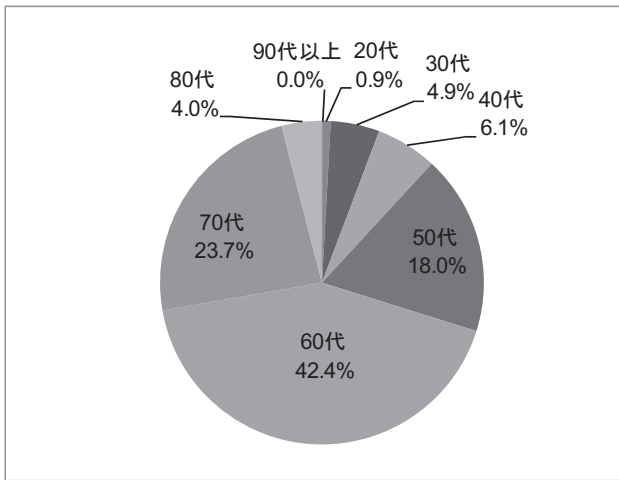


図3 受講生の年齢

前後と多いのに比して、高齢者の多いことがSOAの特色と考えられる。また男女比も他大学では30%の男性が受講していることに比し、男性が多くて20%強であることもSOAの特色である。

3. 受講講座分野

受講生が今どの分野を選んでいるかは図4に示されているように、語学分野が第一である。第二が文学・歴史、第

三が芸術・文化である。この中で男性の受講が多いところが二分野ある。語学分野と文学・歴史分野である。文学・歴史のジャンルはパーセントとしては女性の2倍である。古代日本の神々との「聖地紀行」「古文書に見る幕末社会」「源氏物語」「平家物語」などの講座の中には、すでに600回以上続いているものもある。日本に限らず中国の「唐詩選」「論語」、ヨーロッパの文学の「教養としての聖書」「ギリシャ神話」「バスカルのパンセを読む」や、現代のものでは「宮沢賢治」「司馬遼太郎と藤沢周平」などを一緒に読み解いていく広範囲の文学分野が開講されている。

これに対し、女性が男性より2倍近い割合で受講している分野は、芸術・文化である。「水彩画」「日本画」「スケッチ」「デッサン」「ガラスアート」「トールペイント」「江戸の折形」「歌舞伎の鑑賞の仕方」「朗読」の他、行書やかな書道、裏千家茶道、礼法入門、本格的な発声から歌唱の「歌曲の楽しみ」、初心者のための「ピアノ講座」「ハーモニカ入門」などがある。これらの講座は大学の保育科・児童学科の教員が大学で学生に教えるのと同じことを社会人に教えており、これが大学が地域に果たす役割の実践である。

大学の講座にはないが、女性達に長年に亘り受講されている講座は華道である。生け花、フラワーアレンジメント、プリザーブド、押し花等の講座は人気のあるものである。

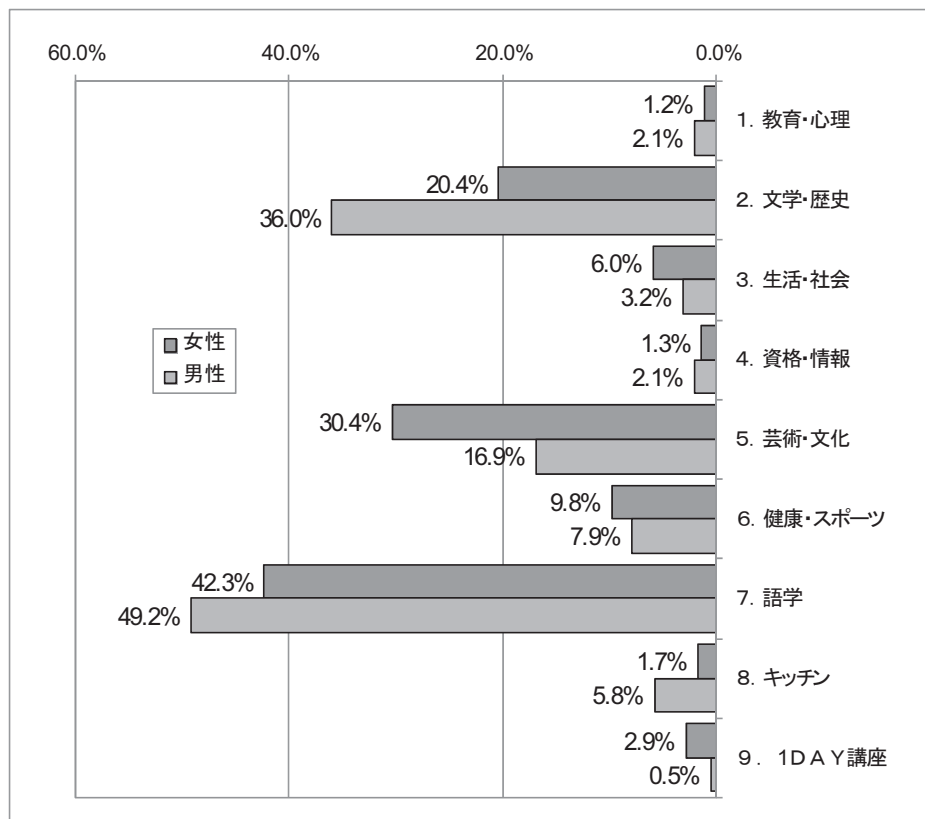


図4 受講分野

4. ジャンル別受講分野

ジャンル別の受講生数は図5に示されている。

その中で著しく右肩上がりに伸びているのは語学講座である。英語 24, ドイツ語 3, フランス語 7, イタリア語 4, スペイン語 8, ポルトガル語 2, ラテン語 2, 中国語 4, 韓国語 11 の多くの言語講座を開講している。次いで伸びているのが芸術・文化分野である。聖徳大学には音楽学部があり、演奏学科教員のコーディネートによるミュージカル講座、パイプオルガン講座、保育科の教員達の歌曲講座、ピアノ講座等の多彩な講座があり、音楽系の講座が開講できるのは音楽学部を持っている SOA の特色であろう。

また管理栄養士コースを大学の学部で持っている人間栄養学科があることが、近隣大学の公開講座と異なる特色である。キッチン関連の講座が14講座開講されている。家庭料理やイタリア料理、中華料理、フランス料理、懐石料理、インド・カレー料理、和菓子講座、世界のお菓子講座、親子のお菓子講座等多彩である。キッチン講座は事前準備のいるものである。講座開講前に材料の発注、保管、当日の料理器具の準備など手間ひまが掛かるものであり、人間栄養学科の教員による助手の配当等、人間栄養学科が存在しないと実施が難しいものである。

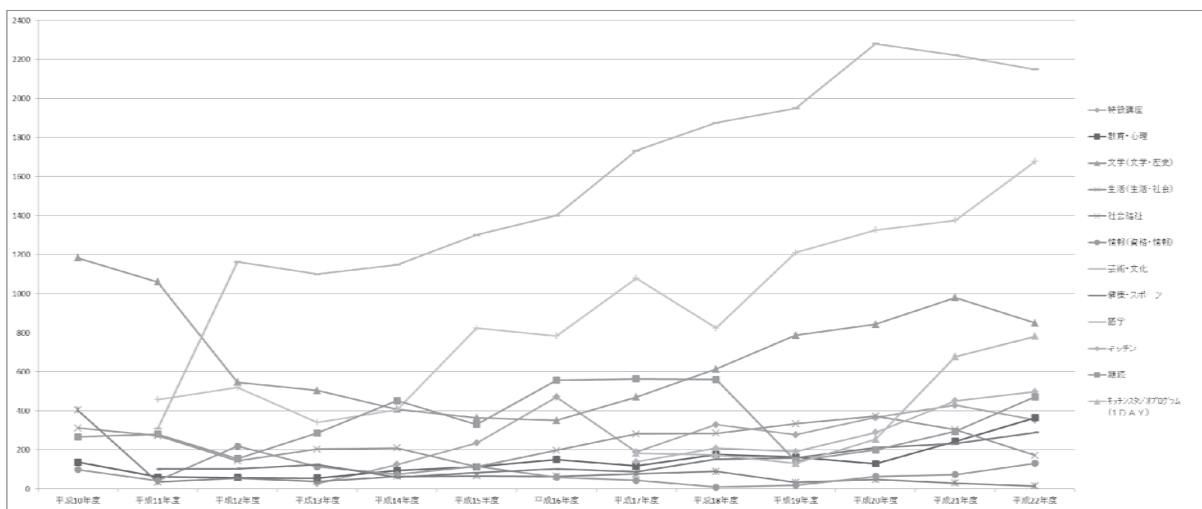


図5 ジャンル別受講者数

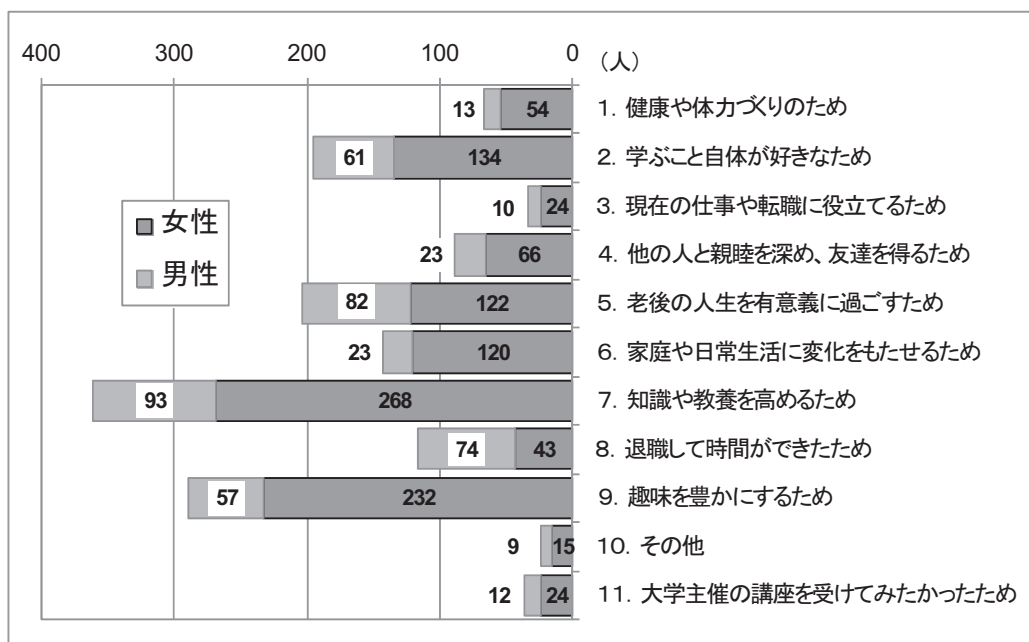


図6 SOA 受講の初動動機

5. 初めて受講した動機

初めてSOAを受講しようと思った動機の中で、一番多かったのは「知識や教養を高めるため」が46.7%であった（図6）。第二が「趣味を豊かにするため」の38.5%，第三が「老後の人生を有意義に過ごすため」で28.0%である。このアンケートの回答の中で、注目をひくのは「老後の人生を有意義に過ごすため」の男女比が女性22.2%に対し、男性41.2%と女性の2倍近いことである。「退職して時間が出来たため」の男女数は男性74人、女性43人。199人の男性の37.4%，3人に1人が退職を機会に受講していることが分かる。「転職に役立てるため」という人は4.4%と非常に少ない。

SOAの講座はいつでも、どこでも、だれでもが学べると

いう講座であるが、このデータからは学びなおしの希望者は少ない。資格取得講座は企画しても成立せず、男女とも趣味や教養を高める目的の人々が圧倒的に多い。

6. SOAの講座継続の理由

通学の下車駅のある常磐線の沿線には聖徳大学以外に天王台、我孫子、柏、南柏、流山等にいくつかの大学がある。その中で、なぜ聖徳大学の講座を選択したかの質問に対する回答は図7に示されている。圧倒的に多いのが「交通の便が良いから」であり、男性69.2%，女性74.3%である。平成16年1月の同様のアンケートの回答では435名の回答者の中で、遠くても大学の校舎の中で学びたい人が94人、21.6%いた。

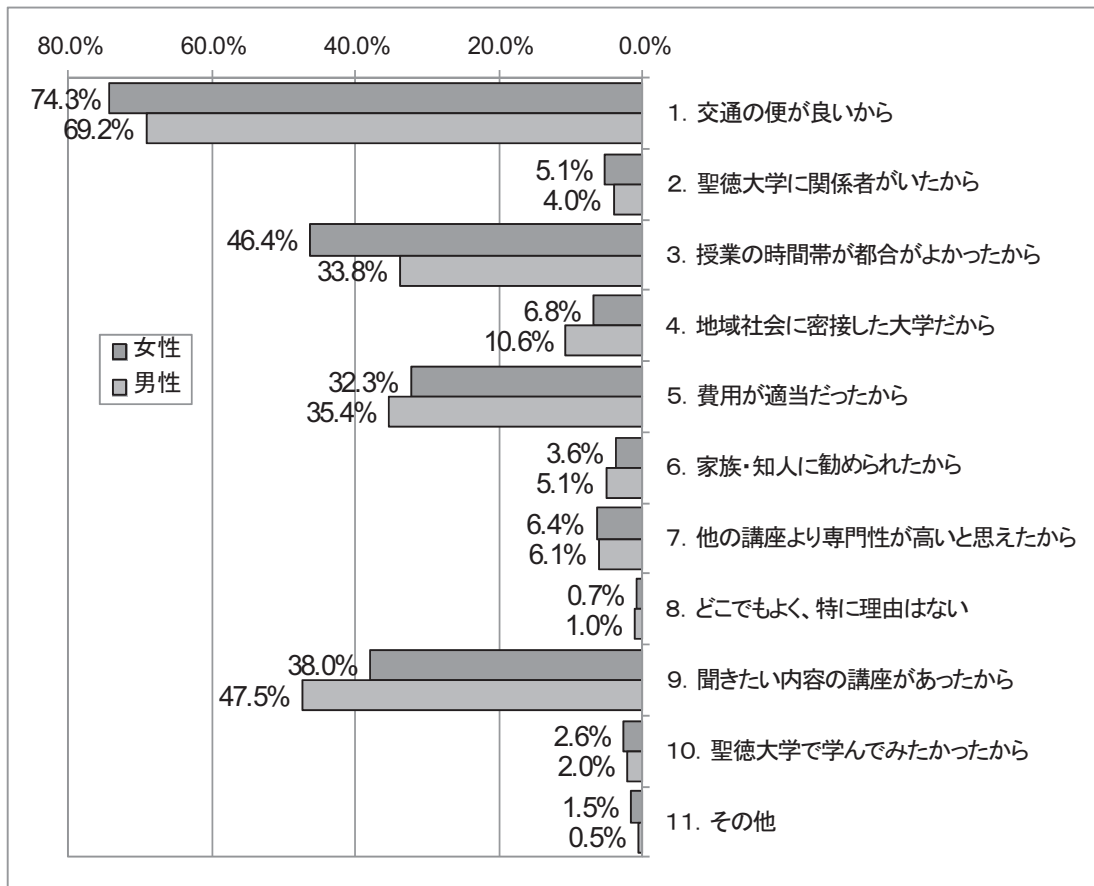


図7 SOA講座継続の理由

平成16年4月から生涯学習の教室は新たに新築された松戸駅前の聖徳大学生涯学習社会貢献センター（10号館）となった。それまでは松戸駅から徒歩6分の聖徳大学キャンパス内の教室で学んでいた。より交通の便利な所に移ったのであるが、受講生達の意見は様々で、遠くても若い学生達の活気ある活動が見えるキャンパスは楽しい、という

受講生の感想がしばしば聞こえた。ここ1～2年10号館内教室が一杯になり、大学キャンパスで開講する講座も増えている。ところがこの大学内教室への移動に関しては、逆に受講生から「1台早い電車に乗らなくてはならないので困る」等の苦情も聞かれる。

次いで多い受講理由は「聞きたい内容の講座があったか

ら」が40.3%と多い。

もうひとつ大きな理由に「費用が適当であったから」が32.9%と高い。現在の受講料は開設以来20年間値上げされておらず、近隣の大学の公開講座より低料金となっている。資格講座や再就職に役立てるためのスキル講座であれば高額な費用も必要経費と割り切れると思う。しかしSOAの受講生は50～60代の女性が多いことを考えると費用の適正さは受講継続の大事な要素であろう。受講生の中にはSOAの講座に600回以上出席されている方も何人かおられる。SOA独自の単位制があり、85分授業を10回出席すると1単位得られる。62単位取れば総合終了証書が授与され、毎年4月の開講式の折に永久会員として表彰されている。

7年前の調査では受講理由の一番が「交通の便」、次いで「費用の妥当性」、三位が「授業の時間帯」、四位が「講座の内容」であった。前回の調査との違いは、第一番は前回と同じ「交通の便」であるが、今回は「講座の時間帯」や「聞きたい講座」が優先し、「費用の妥当性」は四番目と下がっている。毎回講座終了時に行うアンケートで、講座の内容に対する満足度がほぼ90%以上と高いため、良い授業であれば受講料は気にならないと言える。

7. 受講上の困難

「困難な問題は特にない」が全体の30.4%で最も多い(図8)。困難の第一は「自宅学習の時間確保」、第二は「内容についていくこと」の困難さであるが、語学系の予習、復習の時間を取ること、ピアノ、オルガン等の楽器の実技はついていくことが難しいと推測される。年代では50代の22人、60代の20人、40代の12人、30代の10人が自宅学習時間の確保が難しいと書いている。内容についていくことの困難さは、60代22人、50代11人、40代7人と高齢者ほど内容についていく困難さを感じている。

前回の調査でも第一は「自宅学習の確保」、第二は「健康・体力の維持」、三位は「内容についていくこと」であった。順番は入れ替わるが、三位以内の内容は前回と同じであり、高齢者が「健康・体力の維持」に心を使いつつ、「学び」続けていることが推測される。前回も今回も四番目に「授業料の工面」が入っている。今回クロス集計してみると、60代、次いで30代の女性に授業料のやりくりが見られる。年金暮らしに入った60代と、子育て等で自由に趣味に使える資金のゆとりが無い30代ということであろう。

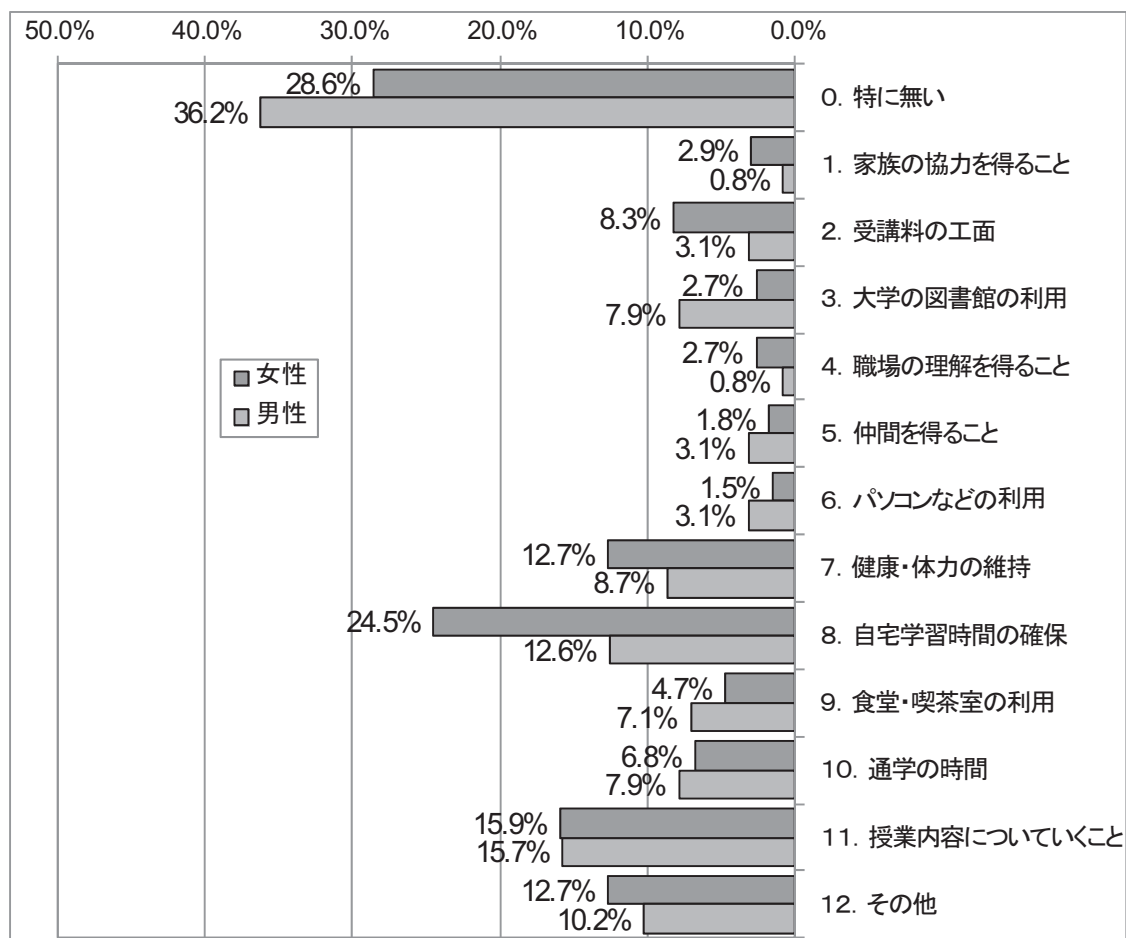


図8 講座受講上困っていること

8. SOA 講座への希望

SOA 講座への要望の第一は「講座内容の充実」である。これは SOA の本命であり最も重要な問題である。講座の企画を考えている教職員組織である生涯学習委員会と生涯学習課が、今まで最も心掛けてきたことであり、今後も最善の努力をしていきたい。

第二の要望は「受講生の憩える待合室」が男性 32.4%、女性 25.5%と高い数字である（図 9）。第三が「受講生の自習室」という設備への要望である。「適切な大きさの教室」がそれに次いでいる。これらの点は教職員とも共感であるが、10号館では難しい問題である。10号館では2階のギャラリーか、8階、10階のミーティングスペースを休憩場として利用していただきたい。大学キャンパス内での授業では、学内の喫茶室や食堂、新築された図書館内のロビーで憩える場所や自習の場を得ることができる。

9. SOA 講座で得られたもの

第一は「良い講師に出会えた」が 85.0%であり、「新しい知識や教養が身についた」が 77.8%と回答している（図 10）。これは生涯学習の目的とするところであり、SOA の講座の今日の発展の第一の原因であろう。次いで「受講生同士の人間関係が広がった」が 60.7%と第三位である。

SOA の講座の受講生たちから「仲間が出来たことが成果である」と時々聞かされたので、今回講座を離れての仲間作りを調査してみた。その中で受講生たちが、講座の終わった後受講生同士でお茶や食事に行くことがあると言っている人にしばしば出会った。そこで調査した結果、受講

生同士懇親の集いを持っている、と回答した人が 515 人（72.2%）と実に多く、内訳は女性は 401 人、男性は 114 人であった（図 11）。

7割以上の受講生が講座終了後懇親の場を持っていることになる。男女差もあまりなく、講座の後は毎回お茶や食事の集いを持っている女性は 25.2%と 4 人に一人、男性は 17.2%である。時々みんなでお茶会をする受講生は女性 29.1%、男性 21.4%。女性は 3 人に一人、男性は 4 人に一人いる。

さらに講座の仲間が国内旅行、外国旅行等講座以外の企画をしているものが 41 人いることも特記すべきである（図 12）。会員や講師の自宅での食事やお茶会は 63 人が経験しており、展覧会や歌舞伎鑑賞等もあり、ゴルフなどに同行も 5 人いる。（因みに SOA の講座にゴルフ講座はない。）

こうした懇親の仲間作りは楽しいが、懇親の会がなくても 81.6%の受講生は、講座を継続すると言っている。SOA の目的が「学びの場」であることはしっかりと堅持されている。しかしその講座を長く続けさせているのは、懇親を含めた会員同士の支えあいではないだろうか。

10. 希望する受講講座時間帯

SOA の講座を企画する折、どの時間帯に開講するのが良いかは、講師の希望と同時に受講生の希望帯を調整していかなければならない。受講生の大半は月曜日から金曜日の週日希望が多い（図 13）。女性たちにとって土日は家族を優先したサービスの時間であろう。月曜日午前中は家族が出勤や登校し、その後の家の中の掃除洗濯を行うと推測さ

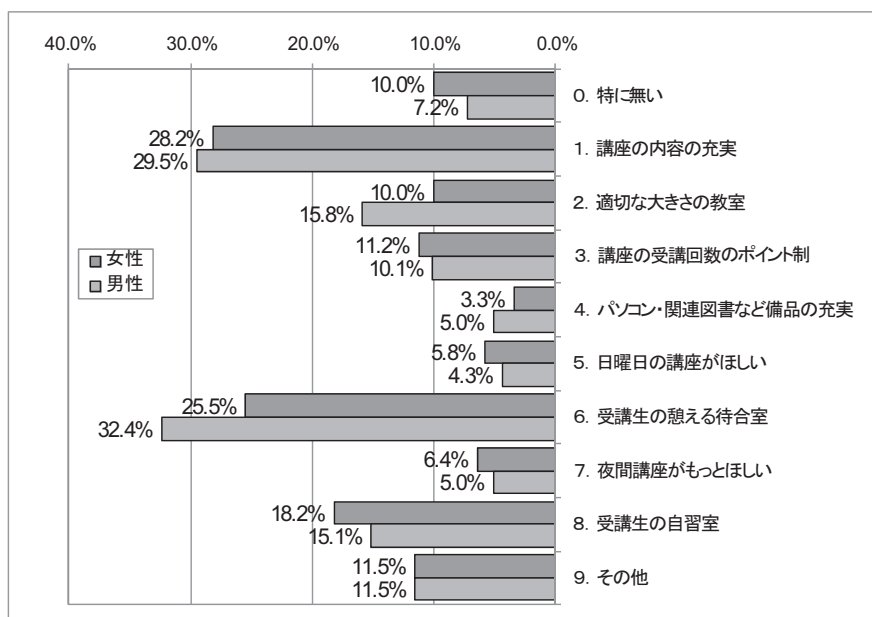


図 9 SOA 講座への希望

れ、この時間帯の希望が少ない。また金曜日の午後の授業も避けたいという傾向が従来から主婦層にあった。現在土曜も講座を開講しているが、土曜日は週日仕事で受講できない人々を対象にした講座を入れるように工夫をしている。受講希望時間帯は平日の午前が54.3%、午後が35.3%となっている。土曜日を望む声は7～8%、日曜日の開講を望む声も4%ほどあった。が、大学が日曜日は休日となっているので、SOA も日曜日は休館である。

11. 受講生の就業状況

受講者の25%は就業者である(図14)。また仕事の内容も正規もパートもあり(図15)、就業日数(図16)も長いので、講座の時間帯も工夫がいる。

就業者の仕事内容はフルタイムが31%、パート・バイトが46%。パートの人も4人に一人であるから、自分の就業のない日時をSOAの講座受講に充てる工夫をしていると考えられる。

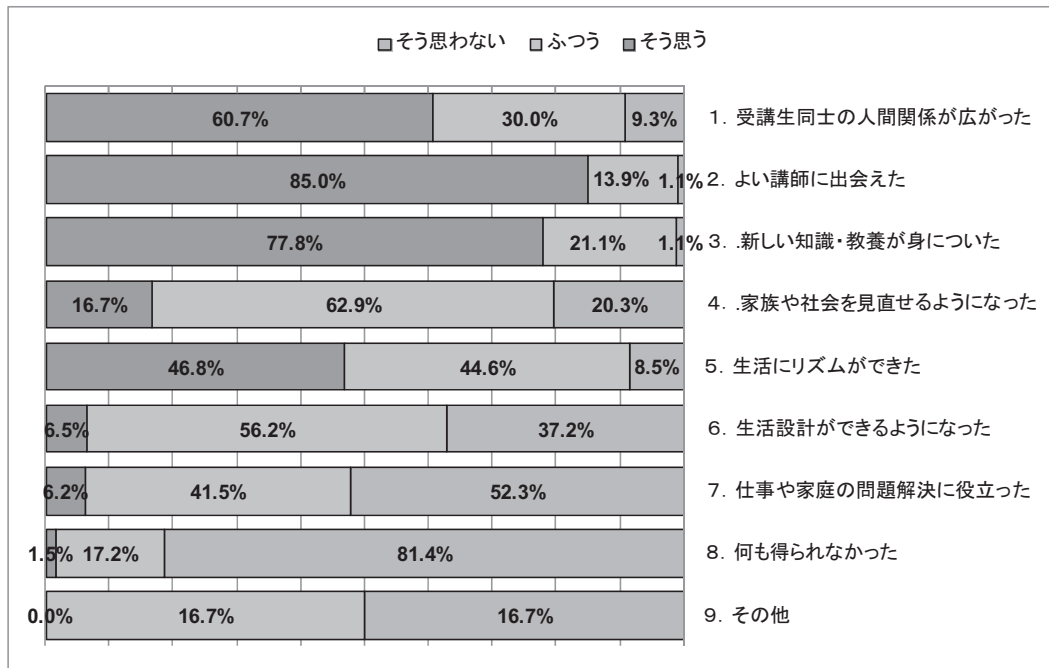


図10 SOA 講座で得られたもの

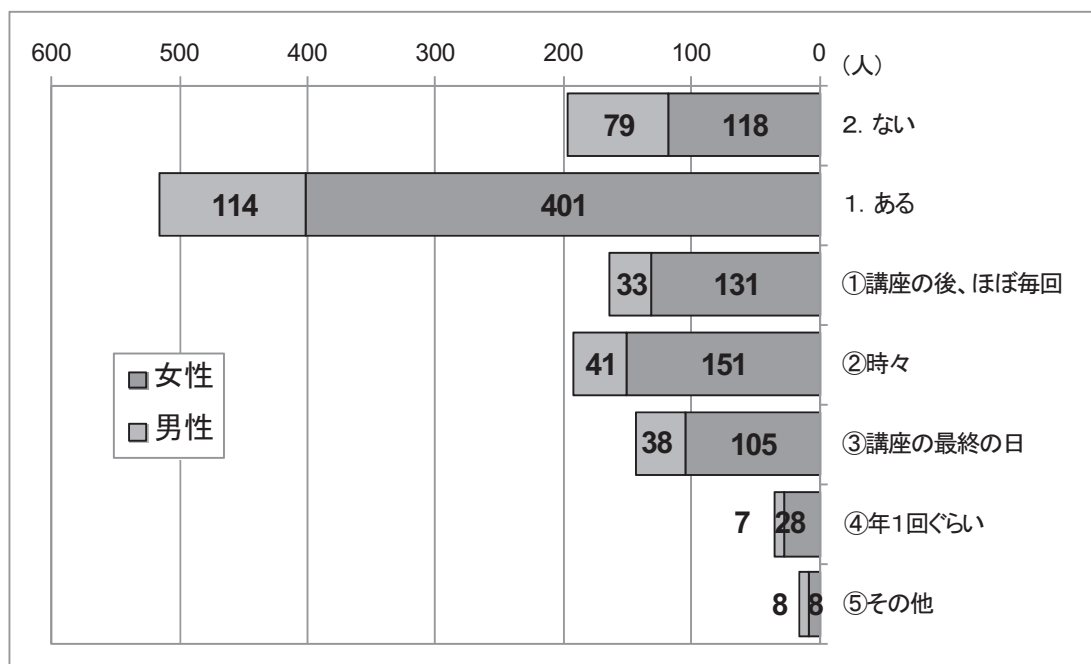


図11 懇親のつどい

12. SOA の今後の対応と課題

今回の調査は平成24年度にSOAの20周年を迎えるにあたり、成果の評価と一区切りの反省を行い、今後の未来図を考えたいと思ったからである。同時に東日本大震災を経験した直後の最初のI期講座から受講生が激減したた

め、この激減の原因と、この震災からの立ち直りを熟考しなかった。受講生に「震災後あなたはSOAの受講をどのように考えたか」の問いに、全体の74.6%の人が「震災と講座参加は特に関係はなかった」と回答している。外出意欲を無くし、I期の講座の申し込みを中止した人は13人、

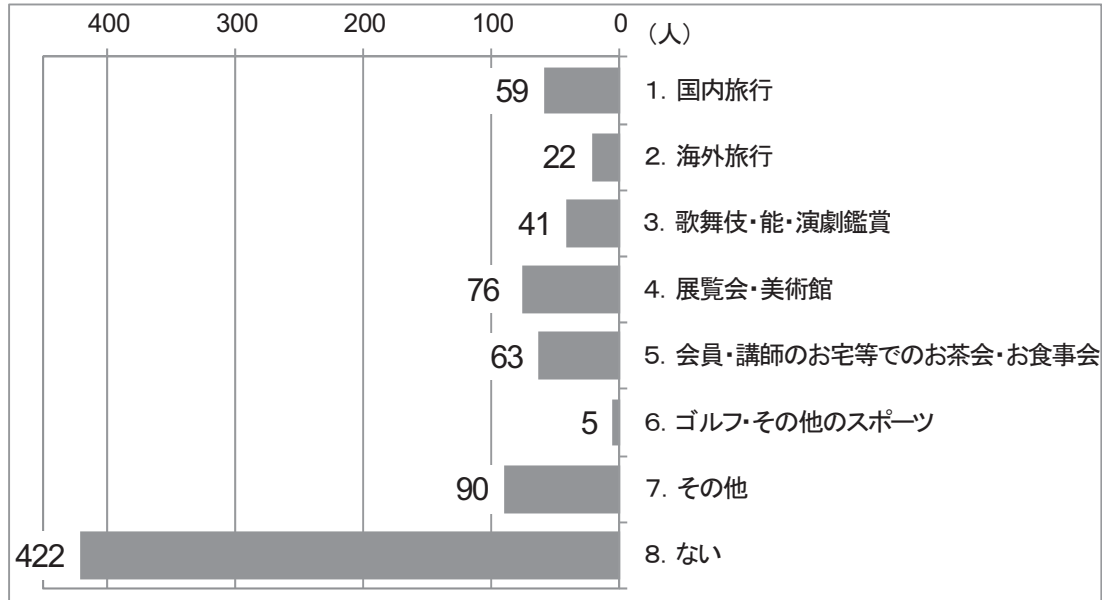


図12 講座以外での会員の企画

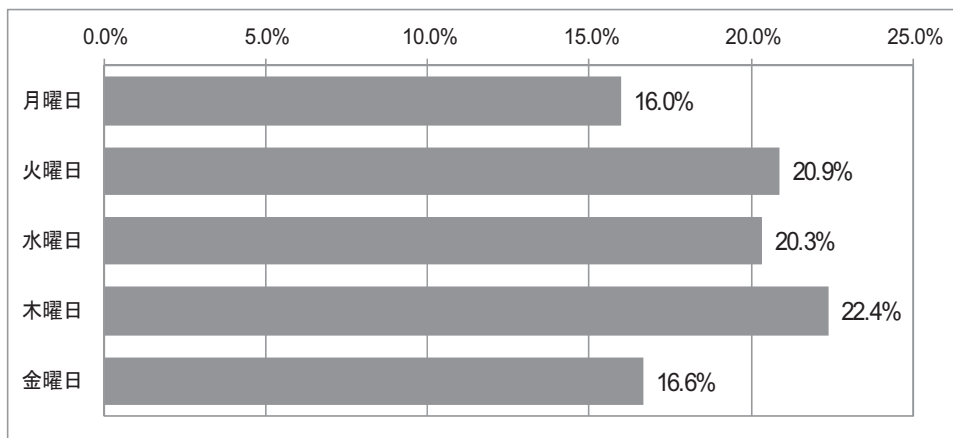


図13 講座受講希望曜日

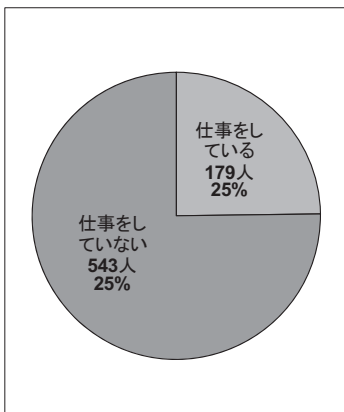


図14 就業者数

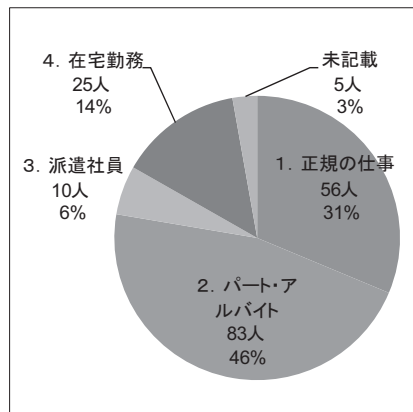


図15 就業内容

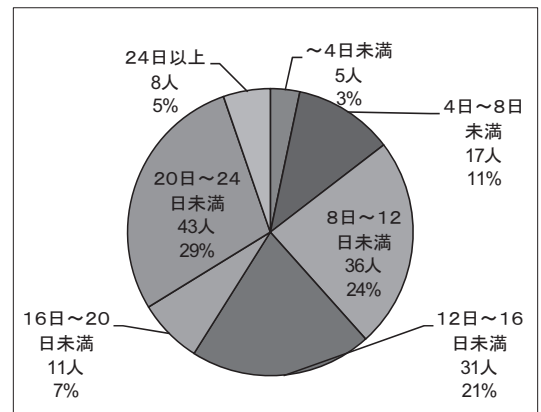


図16 就業日数

経済的な先行きに不安を感じ講座受講数を減らした人 4 人、しばらく迷ったが講座に出ることを決めた人は 112 人 (15.7%)、このような不安な時は仲間と会って励ましあおうと思った人は 103 人 (14.4%) であった。

震災直後の 4 月からの I 期講座は中止したが、9 月からの II 期講座に戻ってきた受講生が 300 人は増えていた。徐々に受講生も戻ってきているが、23 年春から受講生が激減する傾向は、聖徳大学のみならず近隣の公開講座等においても見られる。資格取得系ではなく、趣味や教養のための講座が多い所では同様の傾向があるようである。大学においても就職に役立つ実用的な資格の取れる学科の受験生は増えているが、資格と関わらない文学・語学・文化系の学科は昨年より学生は減っている。

23 年以降世界的に経済危機が深刻になり、人々の先行き不安感が節約ムードを生み出していると推測される。その上に震災が心に残した爪痕も大きい。SOA の講座の行われている千葉県北西部の東葛飾地域は平成 23 年 3 月 21 日の風向きにより、福島原子力発電所の放射能が流れ、周囲より放射線量の高いホットスポットになっている。事故直後は水道水からも放射性物質が確認され、乳幼児のための飲料水としてペットボトルの水を買う親たちの長い列がスーパーなどに出来たほどである。現在も校庭や公園の除染のために芝生や土の入れ替えが行われており、一般の家庭でも自宅周辺の側溝の泥の除染を、市の指導下に行っている現状である。

こうした中で生涯学習の果たす役割は、人々を元気づける「より良い充実した講座の提供」であろう。「その内容は何か」を私たち SOA の教職員は常に検討を重ねている。平成 24 年の 1 月からは、時代の課題に共に向き合っていくべく特設講座を企画した。講座名は「東日本大震災～今改めて向き合って」である。また平成 24 年度の年間テーマとして「ライフ～いのち、暮らし、人生」を掲げ、この 1 年間、いのちに関わるテーマを多く開講したいと思っている。SOA が 20 年間発展してきた原因は、こうした地域住民の「学びへの要望」と大学の「教員たちの知的財産」を繋ぎ続けてきたためではないかと思う。

毎回講座終了時に全受講生に「今後開講を望む講座」の希望を聞いている。SOA の教職員は、それらの中から実現できる講座を毎年企画しているが、さらに受講生たちが一層元気に生きがいを感じて学び続けてもらえるよう、また今後 20 年間、いやもっと長く地域の学びの拠点として発展できるよう、これからも更なる日々の努力重ね続けていきたい。

最後になりましたが、この度のアンケートに関して、印刷・配布・回収を生涯学習課の皆様、データ打ち込み・グラフ作成をウインディーエンタープライズの鈴木清丞様にお世話になりました。ここに改めて心より感謝申し上げます。